『世説新語』に於ける王羲之と殷浩及び劉惔との関係

塚本　宏

はじめに

『世説新語』の著者である劉義慶（403～444）は、南朝の宋の人である。彼の詳細については、『宋書』巻五十一宗室伝、及び『南史』巻十三宋宗室、諸王伝に記されている。義慶は長沙王劉道憐の第二子で、南朝宋の始祖である武帝劉裕（356～422）の甥にあたる。東晋の安帝の元興二年に生まれたが、武帝の末弟の臨川王劉道規に子がなかったのでその養子となり、臨川王を永初中に継いだ。義慶の官は、侍中、丹陽尹、中書令と天子の側近としての要職を歴任し、後に地方に出て、荊州刺史、江州刺史、開府儀同三司などの官を務めた。そして、文帝の元嘉二十一年都で病死した。なお、『南史』列伝巻三には

義慶幼爲武帝所知。年十三、襲封南郡公。永初元年、襲封臨川王。元嘉中、爲丹陽尹。

とある。即ち、安帝の義熙十一年（415）、十三歳で南郡公、武帝の永初元年（420）、十八歳で臨川王を襲封し、その後、文帝の元嘉中に丹陽尹に着任している。そして、さらに詳しく

（元嘉）六年、加尚書左僕射、八年、太白犯左執法、義慶懼有災禍。乞外鎮。文帝詔諭之、以為玄象茫昧。（中略）九年、出爲平西將軍荊州刺史加都督。荊州居上流之重、資實兵甲、居朝廷之半。故武帝諸子徧居之。義慶以宗室令美。故特有此授。性謙虚。（中略）性簡素寡嗜慾。愛好文義、文辭雖不多、足爲宗室之表。

とある。即ち、性格は謙虚で簡素であり、嗜慾は寡く、文義を愛好し、宗室の表となった。

そして、著す所の『世説新語』（以下略して『世説』とする）

は、後漢末から東晋末に至るまでに活躍した人物の言動の記録である。一種の小説風に書かれたもので、『隋書』経籍志の「子部小説類」の中に見える。即ち、

世説八巻、宋臨川王義慶撰、世説十巻、梁劉孝標注。

とある。これは、単なる歴史的なエピソード集ではなく、小説としての魅力を読者に感じさせるような文体であり内容である。時代や人物は歴史に則ってはいるが完全なる史実に基づいてはいない。従って、「史部雑伝類」に属するのではなく、「子部小説類」に加えられているのである。

この『世説』中、実は王羲之（307頃～365頃）は四五話の小話に登場する。全篇の小話総数は、一、一三〇話であるから、全体の三・九八％にあたる。また、登場する人物は七八八名である。その中で、第一位は謝安の一一四話、二位は桓温の九四話、三位は王羲之の伯父の王導の八七話、四位は劉惔の七五話、五位は庾亮と司馬昱の五八話である。そして、〈表1〉にあるように王羲之四五話は第十一位である。また、羲之の小話中に登

〈表1〉『世説』中の登場人物のランキング

順位	登場人物	小話数
1	謝安（320～385）	一一四話（一〇・二％）
2	桓温（312～373）	九四話（八・三％）
3	王導（267～330）	八七話（七・七％）
4	劉惔（？～？）	七五話（六・七％）
5	庾亮（289～340）	五八話（五・一％）
5	司馬昱（320～372）	五八話（五・一％）
7	王濛（309～347）	五七話（五・〇％）
8	殷浩（？～356）	五〇話（四・四％）
9	支遁（314～366）	四九話（四・三％）
10	王敦（266～324）	四六話（四・〇％）
11	王羲之（307～365）	四五話（三・九％）
12	王衍（256～311）	四二話（三・七％）
13	王戎（234～305）	三六話（三・二％）
14	周顗（269～322）	三四話（三・〇％）
14	桓玄（369～404）	三四話（三・〇％）

〈表2〉王羲之の小話中の登場人物と回数

順位	登場人物	小話数	順位	登場人物	小話数
1	謝安	10（22.2％）	7	王敦	3（6.7％）
2	阮裕	5（11.12％）	7	殷浩	3（6.7％）
3	劉惔	4（8.9％）	7	王胡之	3（6.7％）
3	支遁	4（8.9％）	12	謝万	2（4.4％）
3	王導	4（8.9％）	12	王濛	2（4.4％）
3	庾亮	4（8.9％）	12	郗愔	2（4.4％）
7	許詢	3（6.7％）	12	王述	2（4.4％）
7	孫綽	3（6.7％）	16	諸葛恢	1（2.2％）
			（以下省略）		

場する人物の回数を調べたのが〈表2〉である。

さて、本稿は、東晋の中軍将軍、揚州刺史を歴任した殷浩（?～356）（〈表1〉では第八位）と羲之、清談の名手である劉惔（〈表1〉では第四位）と羲之とのそれぞれの関係が、『世説』及び『晋書』等の中でどのように展開されているかを調査し、また、各人の業績や人間性についても具体的に考察を加えていきたい。

一

殷浩（?～356）、字は淵源、陳郡（河南省）の人。東晋の予章太守の殷羨の子、東晋の丹陽尹、吏部尚書の韓伯の伯父である。妻は王羲之の伯父の王導（267～330）の参軍となり蘇峻の反乱鎮圧に功を建てた袁耽の妹である。殷浩は東晋の中軍将軍、揚州刺史を歴任した。晩年は征西大将軍であり、大司馬であった桓温に憎まれて官位を奪われた。彼は老荘の学を好み清談に長じていた。

『晋書』巻七十七（列傳第四十七）には、

殷浩、字淵源。陳郡長平人也。父羨、字洪喬、爲豫章太守。都下人士。因其致書者百餘函。行次石頭。皆投之水中曰、沈者自沈、浮者自浮。殷洪喬不為致書郵。其資性介立如此。終於光祿勲。浩識度清遠、弱冠有美名。尤善玄言、與叔父融俱好老易。融與浩口談則辭屈。著篇則融勝浩由是爲風流談論者所宗。（後略）

とある。即ち、殷浩の識見と度量は清遠で、弱冠にして美名があった。また、「玄言」即ち、奥深い言葉を善しとし、叔父の殷融とともに老子や易を好んだ。そして、殷浩は清談にも長じ、風流談論者の中心的存在であり、清談の徒の間では尊敬された。

殷浩は建元の初めに徴されて建武将軍となり、後に揚豫徐兗青の五州の軍事を都督し、姚襄の反に将を遣はし撃たしめて敗れ、廃せられて庶人となり、永和中に卒した。

さて、『世説』中における王羲之と殷浩との関係は、次の〈表3〉によってその全貌がわかるが、二人が同場面に登場する小話は、※印の三話のみである。なお、殷浩の小話数は五十話であるから、羲之は殷浩の小話の六%に登場していることになる。その三話とは次の各小話である。即ち、

(1) 賞誉第八 ――80
(2) 賞誉第八 ――100
(3) 容止第一四――24

と、「賞誉」二話、「容止」一話である。〈表3〉の中の篇名である「賞誉」とは「ほめことば」の意であり、人物批評のうち特に「ほめことば」の内容を収録した篇である。

先ず、賞誉第八80に

〈表3〉「世説」の中の殷浩と劉惔

巻	篇名	小話数	殷浩の小話	登場人物	劉惔の小話	登場人物
上巻	徳行第一	47話			35	1
	言語第二	108	80	2	67・69*・73・(7)・48・54・64・66	18
	政事第三	26	22	2	18・22・(2)	6
	文学第四	104	22・23・26・27・28・31・33・34・43・46・47・48・49・50・51・56・59・74・(18)	42	26・33・46・53・56・(5)	16
中巻	方正第五	66	53	3	44・51・53・54・59・(5)	13
	雅量第六	42				
	識鑒第七	28	18	4	18・19・20・(3)	11
	賞誉第八	156	80*・81・82・86・90・93・99・100*・113・115・117・121・(12)	29	75・77*・83・86・87・88*・95・109・110・111・116・118・121・124・130・131・135・138・146・(19)	53
	品藻第九	88	30*・33・34・35・38・39・51・67・(8)	23	29*・30*・36・37・42・43・44・48・50・56・58・73・76・77・78・84・(16)	64
	規箴第一〇	27				
	捷悟第一一	7				

巻	篇名	小話数	殷浩の小話	登場人物	劉惔の小話	登場人物
中巻	夙慧第一二	7				
	豪爽第一三	13				
下巻	容止第一四	39	24*・(1)	5	27・(1)	4
	自新第一五	2				
	企羨第一六	6	4・(1)	3		
	傷逝第一七	19			10・(1)	2
	棲逸第一八	17				
	賢媛第一九	32				
	術解第二〇	11	11・(1)	3		
	巧芸第二一	14				
	寵礼第二二	6			4・(1)	2
	任誕第二三	54	37・(1)	4	33・36・40・(3)	9
	簡傲第二四	17				
	排調第二五	65	47・(1)	4	13・17・19・24・29・37・60・(7)	35
	軽詆第二六	33	10・(1)	3	9・10・13・14・(4)	14
	仮譎第二七	14				
	黜免第二八	9	3・5・(2)	3		
	儉嗇第二九	9				
	汰侈第三〇	12				
	忿狷第三一	8				
	讒險第三二	4				
	尤悔第三三	17				
	紕漏第三四	8				

巻	篇名	小話数	殷浩の小話	登場人物	劉惔の小話	登場人物
下巻	惑溺第三五	7				
	仇隙第三六	8				
合計	36篇	1,130話	50話	134人	75話	248人

(注)小話欄の数字は小話の番号を表す。※印は王羲之が登場する小話である。

殷中軍、王右軍を道いて云う。「逸少は清貴の人なり。吾之に於いて甚だ至り、一時に後るる所無し」と。

とある。即ち、殷浩は羲之のことを絶賛して「清貴の人」と表現しているが、一体これは羲之のどのような事をとらえて言っているのであろうか。「清貴」とは「清らかで濁りがなく、気高い」であり、「高尚で上品」ということである。そして、さらに付言して「吾これに於いて甚だ至り、一時に後るる所無し」とある。即ち、殷浩が羲之に対して最大級の敬愛の念を持ち、この点について当世の誰にもひけをとらないのが羲之であるという誉めぶりである。また、劉孝標の注は『文章志』を引用して「羲之高爽にして風気あり。常流に類せず。」とある。即ち、「羲之は気高くさわやかで風格があり、凡俗と異なっている。」という意である。

また、賞誉第八100には、

殷中軍、右軍を道う、「清鑒貴要なり。」と。

とある。前述の「清貴」に加えて「清鑒貴要」と四字で表現している。「清鑒貴要」はやはり「濁りのない見識をもち、気品があって要を得ている。」という意である。そして劉孝標の注は『晋安帝紀』を引用して「羲之風骨清挙也。」とある。即ち、「羲之は風格秀抜である。」の意である。

さて、ここで一つ考えておかなくてはならないことは、前にも述べたように、どうして殷浩は羲之の人柄をこのように最大級の言葉で誉めるのかということである。殷浩が誉める裏に何かがあるのではないだろうということである。

それは、一体何かと推測してみると、朝廷からの羲之への仕官の命である。具体的には殷浩の裏面工作と思われるところの護軍将軍を授けるという、中央政府へ入れるための勅命である。これに対しては、羲之は何としても辞退しようと表明するが、仲々思うように運ばなかったのである。羲之の人生の理想は、友人の書翰にもあるように、草沢にあってゆったりとくつろぎ、人間らしく生きたいということである。しかし、その願いは叶うことなく、かさねがさねの朝命があり、名家である王家を守るため、あるいは自分自身を守るためということで泣く泣く仕方なく中央政府への出仕を承諾したのである。最大級の誉め言葉の裏には殷浩の「以って命を恭しくせざる可からず。」と強引な言こそは、殷浩の眼からは羲之以外には他の人は存在しな

いという力強い推薦である。要するに、殷浩が羲之のことを「清貴の人」「清鑒貴要たる人物」と誉める裏面には、二人の間の強い信頼関係、即ち、依頼に対しては必ず受けるというような、黙していても通じ会える程の関係になっていたのであろう。

なお、この護軍将軍の任に関しては、『晋書』（巻八十）王羲之伝に殷浩の書翰がある。即ち、

揚州刺史殷浩、素雅より之を重んず。勸めて命に應ぜしめんとし、乃ち羲之に書を遺りて曰く、

悠々たる者おもへらく、足下の出處、政の隆替を觀るに足ると。吾等の如きも、亦た謂ひて然りと爲す。足下の出處の、正に隆替と對するが如きに至りては、豈に一世の存亡を以て、必ず足下の從容の適に從はしむ可けんや。幸はくは徐ろに衆心を求めよ。卿、時に起たずんば、復た以て美政を求む可けんや。豁然として懐ひを開くには若かず。當に萬物の情を知るべきなり。

とある。羲之の進退、即ち、護軍将軍の任を受けて、中央政界に入るか否かが東晋の政治の盛衰と関連があると言われれば、止むを得ないのであろう。「羲之がここで起ち上がらなければ、今後よい政治を求めることができるであろうか。ここで豁然と心を開いて、人々の気持を受け入れるべきである。」と書翰の中で説得されれば、さすがの羲之も承諾せざるを得ないということである。そして、羲之は苦悩のうちに意志を曲げて、次のような返信をのこしている。即ち、

吾は素自り廊廟の志無し。王丞相の時に直り、果して吾を内れんと欲するも、誓って之を許さず。手跡は猶ほ存す。由來尚し。足下の政に參ずるに於て、はじめて進退するにあらず。兒娶り女嫁して自り、便ち尚子平の志を懐かんと、數々親知と之を言ふこと、一日には非ざるなり。若し驅使を蒙らば、關隴・巴蜀も、皆な辭せざる所。吾は專對の能無しと雖も、直だ謹んで時命を守り、國家の威德を宣べんこと、固り當に凡使に同じからざるべし。必ず遠近をして、咸く朝廷の、心を無外に留むるを知らしめん。此の益する所は、殊に護軍に居るに同じからざるなり。漢の末、太傅馬日磾をして關東を慰撫せしむ。若し吾の輕微なるを以てせず、疑ひと爲す所無くんば、宜しく初冬に及びて以て行くべし。吾は惟だ恭しみて以て命を待たん。

とある。草沢にあって人間らしく生きようとした羲之の強い意志は叶えられず、どうしても断れないのであれば地方官として朝廷に役立つと力説するが、それもまた叶えられず、氷が解けるが如く、中央政府への道を歩むことになる。これは、殷浩と羲之との出会い、そして、深い係わり会いによって生じた人間

関係であり、羲之にとっては重要な決断の一場面である。

なお、ここで、羲之の地方官、及び中央政府出仕への官歴について表にまとめておくと、

年号	西暦	年齢	事項
永嘉元	307	1	羲之、誕生。父は淮南太守王曠
太興元	318	12	羲之は父より、前代の筆論の大綱を教授される。
二	319	13	尚書左僕射の周顗に人物を認められ、世に名を知られはじめる。
太甯二	324	18	この頃、司空・太尉の郗鑒の女の璿と結婚
咸和元	326	20	秘書郎として出仕し、のち28歳までに、会稽王友、臨川太守を歴任
九	334	28	中書令の庾亮の参軍となり、のち長史に転ず。
咸康六	340	34	寧遠将軍・江州刺史に遷る。のちに侍中・吏部尚書を召されるも就かず。
永和四	348	42	護軍将軍として中央政府に入る。
七	351	45	宣城太守を求むるも許されず。右軍将軍・会稽内史となる。
九	353	47	三月三日、山陰の蘭亭に会す。
十一	355	49	病と称して郡を去る。
興寧三	365	59	羲之、卒す。

（森野繁夫著「王羲之伝」による）

二

『世説』容止第一四24は、庾亮（289～340）の参軍として幕下にあった頃の秋の夜のことである。即ち、

庾太尉武昌に在り、秋夜気佳く景清く、佐吏殷浩・王胡之の徒、南楼に登りて理詠す。音調始めて遒なるとき、函道の中に屐声の甚だ厲しき有るを聞く。定めて是れ庾公なり。俄かにして左右十許人を率いて歩き来たる。諸賢起ちて之を避けんと欲す。公徐ろに云う、「諸君少しく住まれ。老子此の処に於いて興復た浅からず」と。因りて便ち胡牀に拠り、諸人と詠謔して、坐を竟うるまで甚だ楽しみに任ずるを得たり。後に王逸少下り、丞相と言いて此の事に及ぶ。丞相曰く、「元規、その時風範小しく頽れざるを得ざりしならん」と。右軍答えて曰く、「唯だ丘壑のみ独り存せり」と。

とある。さわやかな秋の夜、征西将軍庾亮の幕僚たち、即ち殷浩や王胡之を先頭に南楼に登って詩を吟じていると、突然そこに下駄の音を激しく響かせて側近十人程を連れて庾亮がやってきた。すでに座にあった一同が早速遠慮して座をあけようとすると、庾亮は「そのままでよい。私もこのままのこのような雰囲気が楽しくて好きだから。」と言って椅子に腰をおろし、若い部下と吟詠し談笑して心ゆくまで楽しんだ。そして、後日に

なって羲之が長江を下って都に行き、王導と語りあった際に、話がその秋の一夜の庾亮の事に及んだ。するとそれを聞いた王導は、「庾亮もその時はいささか無礼講にならざるを得なかったのだろう。」と言った。それに対して羲之は、「あの時、庾亮の心にはただ山水のみがあっただけです。」と答えて言った。

これは、庾亮の人柄の一面がよく表現されている一話である。政治の渦中にあればあるほど、時には秋の夜の風流を全身に感じて、思う存分に楽しむゆとりが不可欠である。正に庾亮が人間らしく生きている証拠であり、風流人庾亮のこのような態度には、恐らく羲之も大いに影響を受けたことであろう。また、その時に将来東晋の国政を担う殷浩や、羲之の従兄弟の王胡之と同席していたということも羲之にとって有意義なことだったのであろう。なお、庾亮に関しては「和洋女子大学紀要」第四十三集「王羲之と王敦及び庾亮との関係について」に詳論がある。

なお、この小話にある劉孝標（462～521）の注には、東晋の廷尉卿、領著作の孫綽の「庾亮碑文」を引用して、

公雅（もと）より好んで託する所、常に塵垢の外に任す。心を柔らげ世に応ずと雖も、その迹を蠖屈し、而して方寸は湛然として固より玄を以って山水に対す。

とある。「方寸は湛然として、固より玄を以って山水に対す。」とは、「庾亮の心の中は実に深く静かで、幽玄な心境で山水に対していた。」という意であり、庾亮の最も人間らしい心境であることを注として劉孝標は説明している。現実的には端然として厳しい態度をとる庾亮が、いくら多忙であってもこのような精神を裏に確保していることの中に、彼の人間として生きる本心を羲之は見たのである。

庾亮は、容止第一四24で紹介されているように、自然の中に没入して我を忘れるような所もみられる人物であったが、それに比較して本稿の主人公である殷浩自身はどのような人柄であるのか見ていきたい。先ず、品藻第九30を読んでみると、これは当時の人々が東晋の東陽太守の阮裕を他の人と比較して評している。この他の人とは、羲之、劉惔、王濛、殷浩の四人である。即ち、

時人、阮思曠を道う、「骨気は右軍に及ばず、簡秀は真長に如かず、韶潤は仲祖に如かず、思致は淵源に如かず。而も諸人の美を兼有す。」と。

とある。阮裕は骨気（骨っぽさ）では羲之に及ばない。簡秀（すっきりしている点）では劉惔にかなわない。韶潤（潤いのある美しさ）では王濛にかなわない。そして、思致（思慮の深さ）では殷浩にかなわない。しかし、阮裕はこれらの四人の長所はみな兼ね備えているという評である。この時人の評を逆に

見ていくと、羲之は骨気、劉惔は簡秀、王濛は韶潤、殷浩は思致がそれぞれ特徴的であり、それぞれが秀れている点と見ることができる。

また、さらに殷浩について、風評も含めて賞誉と品藻の各篇から見て考察していくと、先ず、賞誉第八81に、東晋の司徒左長史の王濛（309～347）の誉め言葉がある。即ち、

王仲祖、殷淵源を称す、「長を以て人に勝るに非ず。長に処すること亦た人に勝る。」と。

とある。王濛が殷浩を誉めて、殷浩が普通の人と異なるのは、単に長所があるから人に勝っているというのではなく、長所をいかに生かすかという点がまた人に勝っている所と言っている。殷浩には普通の人に見られない一工夫があり、非凡な点に多くの人は心引かれる所がある。

なお、この小話の劉孝標の注は、『晋陽秋』を引用して、「浩善以通和接物也。」とある。「通和を以て物に接す。」という殷浩の考えは、何か工夫を加えていろいろな人や物に接するということであり、「通和」、即ち、こだわりなくなごやかに接するという一つの工夫があることが前述の「長所をいかに生すか」という具体例である。

次に、同じく賞誉第八82には殷浩の思慮深さが語られている。即ち

王司州、殷中軍と語り、歎じて云う、「己の府奥、つとに已に傾写す。而るに殷の陳勢を見るに、浩汗たる衆源、未だ測るを得可からず。」と。

とある。即ち、東晋の呉興太守の王胡之は、庫の底まで、もうすっかりはき出してしまったのに、殷浩の陳形を見ると、まことに浩々と潤い、たくさんの水源から水を集め測り知れぬスケールの大きさであると感歎して述べている。この文中で、「浩汗」は殷浩の「浩」、「衆源」は殷浩の字の「淵源」の「源」とをもじっている。さらに劉孝標の注は、徐広の『晋紀』を引用して、「浩清言、妙辯玄致、當時名流、皆爲其譽。」とある。即ち、「殷浩の清談は玄妙なる境地を巧みに論じ、当時の名士たちは皆誉めた。」ということである。殷浩の清談は好評であり彼の人柄の一面を物語っている。

また、賞誉第八86は、王濛と劉惔が殷浩を訪ねて談論をしたとき、劉惔が殷浩の煙に巻かれたという小話である。即ち、

王仲祖・劉真長、殷中軍に造りて談ず。談竟りて、俱に載りて去る。劉、王に謂いて曰く、「淵源は真に可なり」と。王曰く、「卿は故より其の雲霧の中に堕ちたり」と。

とある。殷浩は老荘の思想を好み、清談に長じていたことはよく知られていた。王濛と劉惔が談論に挑戦したが世人の噂どおりに、殷浩の優秀さばかりに押しまくられて、二人は車に乗っ

て即座に帰ってきてしまった。劉惔は殷浩のことを「淵源真可」（淵源は真に可なり）の一言のみであった。すると王濛は「雲霧の中に堕ちたり」と。即ち、うまい具合に劉惔は煙に巻かれたのである。なお、劉孝標の注として『中興書』を引用し「浩能言理、談論精微、長於老易。故風流者皆宗帰之」とある。即ち、「殷浩は論理を得意とし、談論は精緻であり、『老子』や『易』に長じていた。それで風雅の士は皆彼を慕った。」ということで、二人にはほとんど歯が立たなかったのである。要するに理論的に対抗できず、煙に巻かれるようにあしらわれたのである。

また、賞誉第八99は、殷浩は喪があけたあとも十年近く墓地に住んでいたので、彼が官吏として出馬するのかどうかで江南の興亡、即ち東晋王朝の将来をうらなっていたという内容である。即ち、

殷淵源、墓所に在ること幾ど十年なり。時に朝野以て管・葛に擬し、起つか起たざるか、以て江左の興亡を卜す。

とある。この小話からは殷浩がいかに東晋王朝にとって重要人物であったかがわかる。彼がもし仕官しなかったら、東晋王朝は続かないのではないかという朝野の人々の熱き思いがあり、期待があったのである。しかし、歴史は必ずしも思う通りには進まず、大司馬の桓温が殷浩に対して邪魔するかの如く登場してくる。なお、この小話の劉孝標の注は『續晉陽秋』を引用して、「当時、穆帝は幼く、皇太后が朝政に当たった。簡文帝（司馬昱）は賢者に親しみ、人望がありすでに宰相の位についていた。桓温は蜀と洛陽とを平定した勲功があり、西陝の地に勢力をほしいままにしていた。穆帝は自ら文弱であることを思い、桓温に対抗しようとしなかった。殷浩は以前から盛名があり、当時の彼への世論は、管仲・諸葛亮になぞらえていた。そこで殷浩を召して揚州刺史とした。桓温はそれが自分に対抗させようとする意図であることを知って、たいそう怒った。」とある。

桓温の目から見ると朝廷のやり方や殷浩の存在は、自分の思うように運ばないので面白くなかったのであろう。実際、彼の朝廷への功績は大きなものであったので鼻息は荒かったのである。当時の彼の活躍ぶりは、建元二年（344）康帝崩御のあと穆帝は二歳で帝位に即くいう情態であったので、自力を発揮し、永和三年（347）に氐族の成漢を討ち、蜀の地を東晋の版図とした。また、殷浩の北征失敗というマイナス面を一方に睨みつつ、彼は永和十年（354）に関中に入り、永和十二年（356）に洛陽を奪回した。このめざましい活躍に対して、殷浩は北征失敗の上に揚州刺史に挙げるということは、桓温への対抗策としてとらえ怒ったのであろう。

ところが、賞誉第八115の桓温あての手紙に、王濛は殷浩のこ

とを評して書いている。即ち、

王長史、大司馬に与うる書に淵源を道う、「識致案処、時談に副うに足る。」と。

とある。この要旨は、「殷浩は識見と物に動ぜぬ所は世論に十分にかなっている。」と、王濛は殷浩についての誉め言葉を桓温におくっているが、この手紙を受けた桓温は殷浩のことをどのように思ったのであろうか。桓温の直接的な答えということではないが、賞誉第八117にはその答えとして合致する内容の小話がある。それは、桓温が自分の部下の参軍である郗超（336～377）に語っている。即ち、「殷浩は人徳もあり言葉も優れている。もし、彼を尚書令か僕射にしたならば、十分に百官の模範となっていただろう。朝廷の用い方が彼の才能とちぐはぐだったのだ。」と、むしろ朝廷に対する不満を述べている。桓温は殷浩の能力や誠実さは見抜いているのである。従って揚州刺史への抜擢も、その用い方に対しての怒りである。

また、同じく賞誉第八113では、簡文帝の司馬昱が殷浩を誉めている。この誉め方のポイントは、前述の桓温と似ている。それは殷浩の言葉の内容についてである。即ち、

簡文云う、「淵源の語は超詣簡至ならざるも、然も経綸思尋する処は、故より局陳有り。」と。

とある。殷浩の言は「超詣簡至」、即ち、ずばりとむだなく核心に迫る。しかも「経綸思尋」、即ち、筋道を立てて思慮をめぐらすことは囲碁の布陣（局陣）の趣があると称えている。殷浩のことを、王濛は「識見と物に動じない所は世論に十分にかなっている。」と、桓温は「人徳もあり言葉も優れていて、百官の模範となり得る。」と彼の才能を認め、そして、簡文帝の司馬昱は「言は、ずばりとむだなく核心に迫り、思慮深い所は囲碁の布陣あり。」と三者三様に誉めている。

また、賞誉第八121では王濛が劉惔に与えた手紙の中で『易』について触れている。即ち、

王長史の劉尹に与うる書に、淵源を道う、「事に触れて易を長ず。」と。

とある。『易』については前述の賞誉第八86にもあったように、殷浩は得意としていた。この「觸事長易」の表現は、『易』繫辞上にある「觸類長之」を踏まえたのではないかという劉孝標の注がある。当時は『易』の理論を身につけていて、それを自由に展開させると世人の関心を引き、大いにもてたのであろうか。清談の中にも自由にこの理論を展開させれば当時の人々の気持を説得させることもできたのであろうし、殷浩の処生術の一つだったのであろう。

次に、殷浩の品藻第九の小話について見ていくと、本篇は特に他の人物と比較視して論評することが多い。まず、品藻第九

33は殷浩と清談の名手で、西晋の散騎郎の裴遐と比べている。即ち、

人、殷淵源に問う、「当世の王公は卿を以て裴叔道に比す。云何」と。殷曰く、「故より当に暗処に識通するを以てなるべし。」と。

とある。これは王公たちが比べているのであるが、殷浩と裴遐は二人とも哲学的な論理が好きで哲理については理解が深いということが知られ、従って清談も得意という所から尋ねられたのである。しかし、この二人の間について、どちらがどうという優劣には触れることなく、ただ二人とも清談に関しては名のある人物ということにおさめられている。

また、品藻第九34は、今度は司馬昱が同じような内容を殷浩に尋ねている。即ち、

撫軍、殷浩に問う、「卿定めて裴逸民に何如。」と。良久しうして答えて曰く、「故より当に勝るべきのみ。」と。

とある。今度の比較の相手は西晋の尚書左僕射で清談の名手の裴頠（258～291）であるが、これは殷浩は自信を持って「故より当に勝るべきのみ」とはっきりとした口調で答えている。「もちろん私のほうが裴頠より上です。」と当然といった感じである。

また、品藻第九35は、前述した大司馬の桓温と比較しての小話で、二人がまだ若い頃のことである。即ち、

桓公少くして殷侯と名を斉しくし、常に競心有り。桓、殷に問う、「卿は我に何如。」と。殷云う、「我は我と周旋すること久し。寧ろ我と作さん。」と。

とある。これも殷浩は自信を持って桓温よりは私のほうが優れていると桓温の面前で言っている。「私は私と長いことつきあっている。どちらかと言えば私ということにしておこう。」という言い方が、いかにも意味ありげである。しかし、桓温の腹の中は全く逆だったのである。そのことを象徴する小話が次の、品藻第九38の二人の若い時代のことである。即ち、

殷侯既に廃せらる。桓公諸人に語りて曰く、「少き時、淵源と共に竹馬に騎るに、我棄て去れば、已に輒ち之を取る。故より当に我が下に出ずべし。」と。

とある。「殷浩は小さい時から私には頭が上がらないに決まっているのだ。」という強い言い方をして殷浩を軽んじあなどっている。これが桓温の本心なのであろう。

また、殷浩の清談の評判は、世人にはよかったのであるが、司馬昱にはあまりよくなかったようである。この件については品藻第九39にある。即ち、

人、撫軍に問う、「殷浩の談は竟に何如」と。答えて曰く、「人に勝る能わず、やや群心を献酬す可し」と。

とある。人に勝つことはできないが、どうにか人の意見をきいて応酬することができるだけという司馬昱の評は実に厳しい。司馬昱は殷浩のことをそのように見ていたのかとあらためて考えさせられる。しかし、品藻第九67にある謝安（320～385）の殷浩の清談についての見解は少し違っている。これは支遁と比較しての評であるが、「俗世に超然としている所は支遁の方が殷浩より上だが、あくことなく論じたてる弁舌となると、おそらく殷浩の口が支遁を抑えこむであろう。」とある。人の見方、感じ方に違いがあるということであろうか。

品藻第九51は殷浩の評の最後となるが、やはり世間の人々は多く殷浩に味方していたということであろうか、次のような小話がある。即ち、「殷浩の思考の筋はすみずみまで行き渡っていて、（西晋の都督荊州諸軍事の）羊祜（221～278）に匹敵する程優秀である。」とある。羊祜については劉孝標の注に「羊祜の高徳は当時抽きんでていて乱世を済う才があった。殷浩の徳は小さな光であり、どうして羊祜の明るさ、高さに比較することができようか。」とある。要するに羊祜のような素晴らしい人物に匹敵するという世評は殷浩にとって大きな財産である。

三

劉惔、字は真長、相県（安徽省）の人。西晋の秘書監、光禄大夫の劉宏の孫。東晋の宰相司馬昱（簡文帝）のサロンの中心人物で清談の名手。後に丹陽尹となる。

『晋書』七十五（列伝四十五）に

劉惔、字は眞長。沛國の相の人也。祖の宏は、字は終嘏、光祿勲。宏の兄は粹、字は純嘏、侍中なり。宏の弟は潢、字は沖嘏、吏部尚書なり。並に中朝に名有り。時人語りて曰く、洛中雅雅として三嘏有り。父の耽は晉陵太守、亦た名を知らる。惔は少くして清遠にして標竒有り。母の任氏と京口に寓居す。家は貧しく芒屩を織りて以て養と爲す。篳門陋巷と雖も晏如也。人、未だ之を識らず。惟、王導深く之を器じ、後に稍名を知らる。論者は之を袁羊に比す。惔喜んで還って其を母に告ぐ。其の母聰明なる婦人也。之に謂ひて曰く、此れ汝が比に非ず。之を受けること勿れと。又、之を范汪に方ぶる者有り。惔、復た喜ぶ。母、又聽かず。惔、年徳轉升に及んで、論者遂に之を荀粲に比す。明帝の女、廬陵公主を尚す。惔、雅を以てより言理に善し。（中略）性、簡貴にして、王羲之と雅にして相友なること善し。郗愔、傖奴有り。善く文章を知る。羲之、之を愛して、毎に奴を惔に稱す。惔曰く、方回に何如か。羲之曰く、小人のみ。何ぞ郗公に比せんと。惔曰く、若し方回に如ばざれば、故常奴のみと。桓温、嘗って惔に問ふ、會稽王、談更に進やと。惔曰く、極めて進む、

然れども故第三流のみと。温曰く、第一は復た誰ぞと。惔曰く、故我輩に在りと。其の高く自ら標望すること此の如し。

（後略）

とある。劉惔は若い頃より性格は清遠ですぐれていた。母と京口（昔の丹徒、今の江蘇省鎮江県）に住んでいた。家は貧しくわらぐつを作って生計を立てていて、貧しい家に住んでいたが気持は安らかだった。劉惔に対す世論は、袁羊や范汪と比較されて劉惔自身は喜んだが母は反発した。また、桓温に清談について問われたが、目下、自分が一流であることを表明した。また、「中國人名大辭典」には、

劉惔、晋、相の人なり。字は眞長。少くして清遠、標格（品格）あり。母と京口に寓居す。芒屩を織りて養と爲す。雅にして言理を善くす。簡文帝初めて相を作す。王濛と並び談客と爲す。丹陽尹に累遷す。政を爲すこと清静、門に雑賓無し。桓温の不臣之迹有るを知る。帝は形勝の地に居ら使めざるを請い、帝は納れず。温は蜀を伐つ。惔は以って必ず剋んと為す。恐くは終に朝廷を専らにせん。後に竟に其の言の如し。卒後、孫綽之を誄んで云う。官に居て官を官とするの事無し。事に處して事を事とするの心無しと。時人以って名言と為す。

とある。

さて、次に、劉惔と羲之との出会いを『世説』の中で見ていくと、前述の〈表3〉のように、

(1)　言語第二―69
(2)　賞誉第八―77・88
(3)　品藻第九―29・30

の五話であり、劉惔の小話全体が七十五話であるから六・七％が羲之との率である。

先ず、言語第二69は、劉惔と清談の名手であったが夭折した許詢と羲之の三人が登場する。即ち、

劉真長、丹陽の尹為り。許玄度都に出でて劉に就きて宿す。牀帷新麗にして、飲食豊甘なり。許曰く、「若し此の処を保全すれば、殊に東山に勝らん」と。劉曰く、「卿若し吉凶の人に由るを知らば、吾安んぞ此を保たざるを得んや。」と。王逸少、坐に在りて曰く、「巢・許をして稷・契に遇わしむれば、当に此の言無かるべし。」と。二人並びに愧ずる色有り。

とある。

言語第二は、当時の知識人の機智に富んだ会話や、広くて深い教養や知識の中から発せられた言葉を集めた篇である。この言語第二69の小話の言語的にポイントとなる所は、劉惔が許詢に答えている「吉凶の人に由る」、即ち、物事の吉凶は家柄に

よらず人の行ないによるということである。とかく家柄とか土地柄とかを重んじて、人の存在を忘れがちなのであるがその点を劉惔は押えて、人柄や人の行ないによるという理解が許詢にあれば、この素晴らしく快適な劉惔の都での生活も保証されるのは当然という考え方である。

しかし、この場に同席していた羲之は意識が高く、このような内容の話題は「下世話な話し」と決めつけているが、これは羲之のその時の感情で言っているのではない。もし、巣父や許由が稷や契に会ったとすれば、こんな下世話な話しはしないだろうという古代の伝説上の人物と比較して論じている。これは教養ある知識人の羲之の口から出た言葉としては見事であり形よく決まっている。劉惔と許詢の二人が話していることは、次元が低いのではないかという率直な羲之自身の言葉である。その言葉を聞いた二人は大いに自分達を恥じて顔を赤くしたということである。また、会稽の東山の暮らしよりも快適な暮らしを都に築いた劉惔の努力は素晴しいものである。当時、東山は隠棲の地として世に知られ好まれた。許詢も、謝安や孫綽、支遁らと隠棲したと伝えられる。

また、ここで羲之が例として出した巣許の故事は、『荘子』逍遙遊第一に記されている。古代の聖天子である堯帝は徳のある天子として舜とともにその代表である。その堯が許由の人物に惚れこんで天下をこの男に譲ろうとしたが、許由はこの申し出を拒絶したのである。天下は堯の政治のやり方でよく治まっているのに、わざわざ自分が出ていくのは、名を自分から求めることになって不愉快である。また、今の自分の生活にも満足している。自分には天下を治める才能もなく、またその気もないし、巣父も同じ気持である。また、「稷」は堯の時の農官で、農業の神として祀られていて、周の始祖である。「契」は禹の治水事業を助けて、殷の始祖とされる人物である。このような優れた徳の高い人物同志が出会ったら、劉惔と許詢の二人が話し会っていた生活の保証のことなどは、全く下世話な話題であると羲之が教養のある所を見せ、比較して語ったのである。次元とスケールの大きさが二人とは違うというのが本音である。

なお、堯は、姓は伊祁（き）、字は放勛、在位七十二年の後に位を舜に譲った。許由は姓は許、名は由。世を避けて箕山に隠れていたが、堯はその賢人ぶりを知り帝位を譲ろうとした。許由は堯のこの申し出を聞いたあと、耳が汚れたというわけで潁川に行って耳を洗ったとある。また、巣父は、堯時代の隠人で山居して世利は好まず、年老いて樹上に巣を作ってその上に寝たということから巣父と言われる。そして、許由は耳を潁川で洗って汚れを流したが、巣父は許由の耳を洗った水を汚れたといって渡らなかったと伝えられている。これらの伝説は、堯が儒家

の考える理想的な帝王だったので儒家思想に対する批判と皮肉が感じられる。

また、賞誉第八77は、羲之が劉惔と一緒になって謝安を天下に推薦しようという内容である。即ち、

王右軍、劉尹に語る、「故より当に共に安石を推すべし」と。劉尹曰く、「若し安石の東山の志立たば、当に天下と共に之を推すべし。」と。

とある。もし謝安が本当に東山に隠棲しようとする意志の強い人物なら、天下をまかせるに足るであろうから世の人々と共に推薦しようと、劉惔は羲之に答えている。謝安が自分自身のことを重んじて隠棲するような人物ならば、天下の人々をも同様に愛するであろうからということである。謝安は長い間東山に隠棲していたので世の人々は彼の仕官を待ち望んでいたのである。劉孝標の注は、『続晋陽秋』を引用して、「謝安は会稽郡上虞県に住んで山林に悠々自適して、六、七年間仕官しなかった。彼を弾劾する上奏があいつぎ、更に禁錮に処せられたが、それでも平然として気にもとめなかった。」とある。この小話は羲之と劉惔が中心となって何とか謝安を世のため人のために政界に推そうということである。そして、この二人の動きと歴史的事実との関係はどの程度あったのか、確かな所は不明であるが、升平四年（360年）に謝安四十歳で桓温の司馬となった。遅い仕官ではあるが世のため人のため、そして、家のため自分のためであり、二年後には呉興太守に転じている。その後、侍中、吏部尚書、尚書僕射、録尚書事、太保を歴任し、没後は太傅を追贈された。実にめざましい業績であり、もちろん本人の実力によるものであろうが、そのきっかけを作った羲之と劉惔の判断は正しかったと言えるのであろう。

また、賞誉第八88では、羲之が四人の人物批評を試みている。即ち、

王右軍、謝万石を道う、「林沢の中に在りて、自ずから道上を為す。」と。林公を歎ず、「器明神儁なり。」と。祖士少を道う、「風領毛骨、恐らくは世を没するまで復た此の如きの人を見ざらん。」と。劉真長を道う、「雲柯を標するも扶疎せず」と。

とある。この四人とは謝万（謝安の弟、東晋の撫軍従事中郎、予州刺史、散騎常侍を歴任）、支遁（314～366・二十五歳で出家、当時の名士と交わり、仏典の教義を講じ洛陽の東安寺に住んだ）、祖約（東晋の平西将軍、予州刺史を歴任）、劉惔（簡文帝のサロンの中心で清談の名手、丹陽尹を歴任）である。

先ず、羲之は謝万について、山林沼沢の中にいるから自然と力強くなっていると評している。謝安の弟だけあってやはり兄の影響もあったのであろうか、羲之の眼には自然の姿が背景と

して印象に残っているようである。また、二人目の支遁については、簡潔に四字で、「器明神儁」とある。即ち、人物は透明、精神は俊敏である。若い時の約二十年間は会稽の余坑山に隠棲し修行して、大自然から大いに学び、都の建康に出て多くの賢人たちと交流した。三人目の祖約は蘇峻とともに反乱を起したが、蘇峻が敗れると一緒に殺された。その彼について、「あの風格、骨相は二度見られない程素晴しい。」と羲之は称えている。そして、四人目の劉惔については、「雲をしのぐように高々と梢をそびえさせながら、枝葉を押し出そうとしない。」と評しているが、この四人についての評はすべて自然と対面して語っているようで、人間は自然と共存し、お互いに生かし会う中で、羲之自身のやさしい眼差が感じられる各人への評である。特に、四人目の劉惔の表現は羲之の心の素晴しさがごく自然に出ている。羲之は劉惔をこのような眼で見ていたのかと改めて考えさせる内容である。劉孝標の注は『劉尹別伝』を引用して、「劉惔は人望がある上に、明帝の娘盧陸公主を娶り、帝室と姻戚を結んだので、しばしば高官の職にあった。しかし、脱俗の風があり栄利に淡白で高官になっても、いつもへりくだり、もの静かで自らの分を守っていた。」とある。羲之が言う「扶疎せず」、即ち、「四方にその枝葉を繁らそうとしない。」という劉惔の謙遜の精神こそ美しい。また羲之は巧みにそれを表現している。

次に、品藻第九29は、郗愔（313～384）の家の北方出身の下男について、羲之と劉惔が見解を述べている。即ち、

郗司空の家に傖奴有り。文章に知及し、事事意有り。王右軍、劉尹に向かって之を称す。劉問う、「方回に何如。」と。王曰く、「此れ正に小人の意向有るのみ、何ぞ便ち方回に比するを得ん。」と。劉曰く、「若し方回に如かざれば、故より是れ常奴のみ。」と。

とある。郗司空は郗愔、字は方回、金郷（山東省）の人、東晋の司空、太尉である郗鑒の子で、東晋の臨海太守であったが、天師道を信仰して政務を怠り章安（浙江省）に隠棲した。その後再び仕え、平北将軍、会稽内史、司空を歴任した。郗愔は羲之の妻（璿）の実兄であるから、羲之とは義兄弟である。その郗愔の家に北方出身の下男がいた。この下男は文章にまで理解を示し、万事につけて心得があった。羲之が劉惔に向かって彼のことを誉めると、劉惔は「ご主人の郗愔とその下男とを比べてどうかね。」と尋ねた。そこで羲之は「この下男は身分が賤しいものでありながらよく気がきくというまでだ。どうして直接ご主人の郗愔と軽々しく比べることができようか。」と。それに対して劉惔は「もし郗愔に及ばないとすればただの下男にすぎない。」と言った。この劉惔の整然としてはっきりとした

言い方は羲之をてこずらしている。羲之は身分の違う人を比べること自体に異義を感じているが、劉惔は羲之のそのような気持を無視して、人間として郗愔に及ぶか否かの問題としてとらえている。これでは議論にならず見解の相違である。羲之は身分にこだわっているが、劉惔は身分については無頓着である。清談の巧みさの一端を表明している小話であろうか。『世説』全体に見られる表現の一つである。

また、品藻第九30は、当時の人々が阮裕を評している。これはすでに本稿の殷浩の部分で触れているので省略するが、「簡秀は真長に如かず。」という所がこの章（劉惔の章）では関係がある。即ち、「阮裕は、すっきりとしている点では劉惔にかなわない。」ということである。

四

さて、本稿は『世説』の中での王羲之と殷浩、及び王羲之と劉惔とのそれぞれの関係を見てきてが、先ず殷浩については、賞誉第八の二話に両人の出会いがある。賞誉第八では、殷浩が羲之を「清貴の人」と誉め、そして、「このことについては当世の誰にもひけをとらないのが羲之である。」とさらに付言している。また、もう一方の小話では「清鑒貴要」、即ち「濁りのない見識をもち、気品があって要を得ている。」という誉め方である。いずれも「清」と「貴」の二字が入っていて殷浩が見た羲之の評のポイントである。実はこの殷浩の誉め言葉の裏に何かが存在しているのではないだろうかという俗な考えも浮かぶが、はたしてそれを実証するような事実が、羲之の身の上にふりかかってくるのである。それは羲之を何としても中央政府に出仕させたいという願望があったのである。しかし、羲之の腹の中はそれを辞退したいという強い決心でかたまっていたのである。彼の人生設計は草沢にあって自由にゆったりと人間らしく生きたいということであったが、それは単なる理想とされ、多くの人たちの期待があり、多勢に無勢で止むなく中央政府入りを承諾させられるのである。

また、『晋書』（巻八十）王羲之伝にある殷浩の書翰に「羲之が今ここで起ち上がらなければ、今後よい政治が実行できないので、心を広く開いて人々の気持を受け入れるべきである。」と殷浩に力説されると、羲之も泣く泣く承諾せざるを得ないということで中央政府への道を歩むことになる。そして、羲之は二十歳頃、秘書郎として出仕し、二十八歳までに会稽王友、臨川太守。中書令の庾亮の参軍から長史、三十四歳頃に寧遠将軍、江州刺史から侍中に移り、四十二歳頃に護軍将軍、そして、四十五歳頃、右軍将軍、会稽内史となり約四年間務めて、その後病を理由に退官している。殷浩の強い推薦によって出仕した結

果は、はたして多くの人々の期待にそえたかどうかについては具体的には今後の課題であるが、少なからず表面的には王家を守る為にはなったのであろう。

次に、劉惔と羲之との出会いは、『世説』の中では五話であるが、その五話以外の客観的な劉惔の評を賞誉第八の中から寸言を収集すると、劉惔は清談に優れていたことは前述の通りであるが、王濛が支遁に語って、劉惔の清談は「金玉堂に満つ」と、即ち「よい言葉が座敷に満ちている。」と誉め、また、王濛自身が自分のことを「劉惔のわたしに対する評価は、わたしの自己評価より的確だ。」とその要領のよさを誉めている。また、簡文帝の司馬昱は劉惔の言葉について「最後が奇異に感じられるが、その論理をたどってみるとあやまりはない。」と評し、「劉惔はお茶の木のようで見かけはたいしたことはないが、内容は充実していて理にかなっている。」と述べている。また、謝安が「劉惔の言葉は周到で緻密だ。」と誉めている。

また、品藻第九の中の劉惔の一部分を見ていくと、司馬昱が劉惔のことを孫綽に尋ねての答えは「清蔚簡令」、即ち「清らかで深みがあり、すっきりとしていて上品である。」と。そして、劉惔は桓温に対しては清談の第一は自分だと自信をもって自賛している。これは、咸安元年（371）、桓温は荊州から長江を下って都の建康に攻め入り、司馬昱の談論についての上達度を劉惔に尋ねた時の本人の言である。また、王濛も彼の清談について自分の子の王脩に語っている。即ち「言葉の美しさではわたしに及ばないが、いざ言葉を発すると必ず的を射抜くという点では、わたしより優れている。」と誉めている。

殷浩と劉惔、この両人の生き方、考え方は対照的な部分があって、個人的には違いがあっても羲之と対面したときは表向きの顔で、殷浩はいつも政治のこと、劉惔は自然を背景とした清談のことを軸に真剣に語り会っている。日常的には余裕などあり得ない殷浩の人生、しかし、その中にそれを自分の為に生み出そうとしている生き方、一方、劉惔は余裕の中から生れたような人生の中で、その余裕を本当の自分の力として自分を信じて生き、俗に言う単なる余裕という空間にしていない強い生き方について本稿にて二人の特徴を把握することができた。

（付記）

この度、本稿をまとめるに当り、次の文献資料を参照させて頂きました。最後になりましたがここに記して謝意を標します。

世話新語（上・中・下）　目加田　誠著　明治書院
世話新語（上・下）　竹田　晃著　学習研究社
世話新語　森　三樹三郎訳　平凡社

世話新語と六朝文学　大矢根文次郎著　早大出版部
新譯　世説新語　劉正浩他四名注譯　三民書局印行
晋書　中華書局
晋書（和刻本正史）　汲古書院
王羲之　中田勇次郎著　講談社
王羲之　吉川　忠夫著　清水書院
中国人の機智　井波　律子著　中公新書
書苑彷徨　杉村　邦彦著　二玄社
書論（第二十八・三十一号）　書論編集室
王羲之伝　森野　繁夫著　白帝社
王羲之全書翰　森野繁夫・佐藤利行著　白帝社
中国古代思想史研究　赤塚　忠著　研文社
中国書法史を学ぶ人のために　杉村　邦彦編　世界思想社
中国思想辞典　日原　利国編　研文出版
辭源（正続編合訂本）　商務印書館
中國人名大辭典　泰興書局印行
書道芸術（王羲之・王献之）　中央公論社
書道全集　平凡社
中国書道史の10人（「墨」スペシャル28号）　芸術新聞社